

令和4年度第3回紀南地域高等学校活性化推進協議会

配 付 資 料

- 令和4年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿・・・・・・・・ P 1
- 【資料1】令和4年度第2回
紀南地域高等学校活性化推進協議会（7/14）の概要・・・・・・・・ P 2
- 【資料2】紀南地域の高校がめざすべき教育や役割について・・・・・・・・ P 5
- 【資料3】令和7年度に想定される5学級規模の高等学校の
学びについて・・・・・・・・ P 6
- 【資料4】通学に関する状況について・・・・・・・・ P 12
- 【資料5】高等学校における遠隔授業・・・・・・・・ P 15
- 【資料6】部活動の状況と統合による変化について・・・・・・・・ P 17
- 【資料7】地域の中学生・保護者を対象としたアンケート調査（案）
について・・ P 19
- 【参考資料1】紀南地域の設置学科と学級数の推移・・・・・・・・ P 20
- 【参考資料2】学級規模による教育環境の比較・・・・・・・・ P 21
- 【参考資料3】東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）・・ P 23
- 【参考資料4】熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数（予測）と
木本・紀南両高等学校への入学者数・・・・・・・・ P 24

令和4年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿

No		所属及び名前
1	学識経験者	三重大学教育学部 教授 平山 大輔
2	地域有識者	熊野商工会議所 青年部幹事 森本 健一
3		文恵丸水産 代表 長山 行文
4		紀宝町商工会 会長 田尾 友児
5	市町教育委員会	熊野市教育委員会 教育長 倉本 勝也
6		御浜町教育委員会 教育長 辻本 誠一
7		紀宝町教育委員会 教育長 西 章
8	小中学校PTA代表	紀南PTA連合会 会長 野地本 隆 ※3回目より
9		紀南PTA連合会 進路研究委員長 倉本 崇弘
10	高等学校PTA代表	県立木本高等学校PTA 会長 道前 涼太
11		県立紀南高等学校PTA 会長 中嶋 悦雄
12	同窓会・地域代表	県立木本高等学校同窓会 会長 森岡 忠雄
13		県立紀南高等学校学校運営協議会 会長 廣畑 勝也
14	小中学校長代表	熊野市立木本小学校 校長 川崎 奈保美
15		御浜町立尾呂志学園中学校 校長 高田 有治
16	小中学校教員代表	熊野市立金山小学校 教諭 久保 範顕
17		御浜町立御浜中学校 教諭 大崎 重久
18	県立高等学校長	県立木本高等学校 校長 松本 徳一
19		県立紀南高等学校 校長 堀越 英範
20	県立高等学校教員代表	県立木本高等学校 教諭 寺前 淑湖

令和 4 年度第 2 回紀南地域高等学校活性化推進協議会(7/14)の概要

- 1 日時 令和 4 年 7 月 1 4 日 (木) 19 時 00 分から 21 時 00 分まで
- 2 場所 熊野市文化交流センター
- 3 概要

令和 7 年度には、この地域の高等学校は現在の 6 学級から 5 学級規模になることが見込まれています。このような状況の中、これからの紀南地域の高等学校がめざすべき教育や役割について協議したうえで、5 学級規模の高等学校で具体的に想定される学びと配置のあり方について協議を行いました。

主な意見は次のとおりです。

《紀南地域の高等学校がめざすべき教育や役割について》

- 近年、様々な支援が必要な子どもたちは増加傾向にあり、高校においても生徒一人ひとりに応じた指導や支援を丁寧に行うことは大切である。紀南高校では小規模校であることを生かした丁寧な指導や支援により、この地域の担い手を育てているとの評価を得ており、今後、統合した場合でもこのような教育を大切にしていけるべきである。
- 生徒の豊かな社会性・人間性の育成は、地域と協働した教育活動や ICT を活用した校外との交流などの工夫によって、1 学級規模の高校であってもある程度可能となるが、一方で社会性・人間性の育成に大きな効果が期待できる部活動については、人数が少ないとどうしても活動に制限がかかってしまう。子どもたちからのニーズが高い部活動を維持することが地域外の高校への流出を防ぐためにも必要であり、そのためには 1 校に統合するべきである。ただ、生徒の通学しやすい環境を優先すると、2 校舎を利用する方法もある。
- 生徒が自らの興味・関心に応じた学習環境を選択できることが理想であるが、アンケート結果によると、この地域の高校生は学びの内容よりも自分の学力にあった高校を選んでいるという特徴がみられた。今後さらなる少子化が進む中、この地域の高校で大切にすべきことは、できるだけ大きな集団を保ち学びの質を下げないことである。
- 今後も地域の子どもの数は減っていくため、地域外からの入学者を増やす視点が必要だ。全国から紀南地域で学びたいと思える魅力ある教育活動ができるとよい。

- 今まで築き上げてきた学びと学校がなくなるのは寂しいというPTAや同窓会の思いがある。一方、これから高校へ入学する生徒の学びや進路希望を叶えていくことを考えると、これからの地域の高校が1校か2校のいずれであっても、これまでの両校の強みや特色を生かした学びの選択肢を残していくほうがよい。また、部活動についても、最低限の活動が続けられる環境を整えていただきたい。

《この地域の高等学校の具体的に想定される学びと配置のあり方について》

- この地域の高校について、これまで教育現場で出会った6人の子どもたちの率直な声を例としてあげたい。
 - ①部活動は合同チームであっても、地域の代表として全国大会への出場をめざしたい。
 - ②小さいころからプレーしている競技を続けるために、他地域に進学することにした。
 - ③難関大学に合格できる力を塾に行かずに高校だけで身に付けたい。
 - ④難関大学への進学には塾で対応するので、高校の統廃合には関心がない。
 - ⑤家庭の経済的な事情から高校には自転車で通いたい。
 - ⑥学級数が変わったり、他地域からの受検者が多かたりする影響で、年度によって受検の難易度が変わることに不安を感じる。
- 公立高校のみの紀南地域では生徒の進路保障のため、入学見込み人数よりも一定余裕のある定員が設定されていることから、5学級規模の学級配置を4学級と1学級にすると、年度によっては1学級規模の学校が大きく欠員を生じる可能性があり、十分な教育環境を確保できるか心配である。毎年、部活動の充実を求めて地域外の高校へ進学する生徒も一定数いるため、1校に統合してそれらの生徒のニーズに応えられるようにしたほうがよい。
- 地域の高校を1校に統合すれば、紀南地域の中学校卒業者の8割を越える生徒が高校時代を一緒に過ごすことになり、将来にわたってこの地域の多様な価値観を持つ同年代の仲間とのつながりが続いていくことはとても大切なことである。
- 小中学校においても、人間関係でうまくいかなかった時には、クラス替えをすることで居場所を確保することができる場合が多い。生徒も教員も大きな集団にすることで、生徒は自分の居場所を作ることができるし、教員も様々な課題を抱えた生徒を支援する方法を教員同士で考えていくことができる。

- 5学級規模の1校に統合すると、前「県立高等学校活性化計画」で望ましい学級規模としていた範囲の学校となり、生徒の学習環境や授業内容も充実するが、現在よりも通学が不便となる生徒が生じる。そうすると和歌山県への進学希望者がさらに増えて、より流出が加速してしまうのではないか。
- 地域の活性化という視点では、学校がなくなれば、その地域がより衰退していくのではないかと心配している。全国から生徒が集まるような魅力ある高校の取組を進めるとともに、紀南地域全体でこの地域のすべての生徒を育てる気持ちが必要と考える。
- 1校に統合した場合には、現在より通学に時間のかかる生徒もでてくることが考えられる。それを支援する方法をしっかりと考えなければ、5学級で統合しても地域外への流出が進み、すぐに学級数が減ってしまうことになる。
- 全国の高校魅力化の取組を参考に、紀南高校ではより産学連携を進め、たとえばみかん産業の地域学習を商品開発にまで発展させたり、木本高校では三重大学との学術連携を深めたりするなど、この地域ならではの特色を生かしながら、デメリットをメリットに変える発想が大切ではないか。
- 自分の経験からも小規模校では、生徒一人ひとりに対応した少人数ならではの丁寧な指導がしやすくなる。その利点を生かすためにも校舎制を採用し、授業では教員が、学校行事や部活動では生徒が校舎間を移動するなどの方法で、生徒の学びを保証してはどうか。

《その他》

- 今後の学校の配置については、メリット・デメリットを明確に提示したうえで、当事者である小中学生やその保護者に意見を聞いてはどうか。また、これから受検する中学生やその保護者にはしっかりと情報共有してもらいたい。
- 今後の協議会では、引き続き地域の高校の学びと配置のあり方について協議するとともに、より協議を深めるために中学生や保護者に意見を聞くためのアンケートの内容についても協議いただきたい。

紀南地域の高校がめざすべき教育や役割について

紀南地域の高等学校がめざすべき教育や役割に係る当協議会での意見

- ・ 学びの選択肢が充実し、生徒が自ら学びたいと思える学校
- ・ 生徒の進路実現に向け、大学進学や 地元への就職にも 対応できる学校
- ・ 様々な団体と連携する活動が充実し、全国に誇れる魅力ある教育活動を行う 学校
 (地域の産業や企業と連携した学び
 小中学校、大学等の地域の教育機関と連携した学び 等)
- ・ 様々な支援が必要な生徒をはじめ、一人ひとりへの丁寧な指導により自己肯定感を高める 学校
- ・ ICT を活用して地域外ともつながる学習活動が充実している学校
- ・ 学校行事や部活動が活発化している学校
- ・ 集団の中で 多様な考えや価値観に触れながら、豊かな社会性、人間性を育む学校

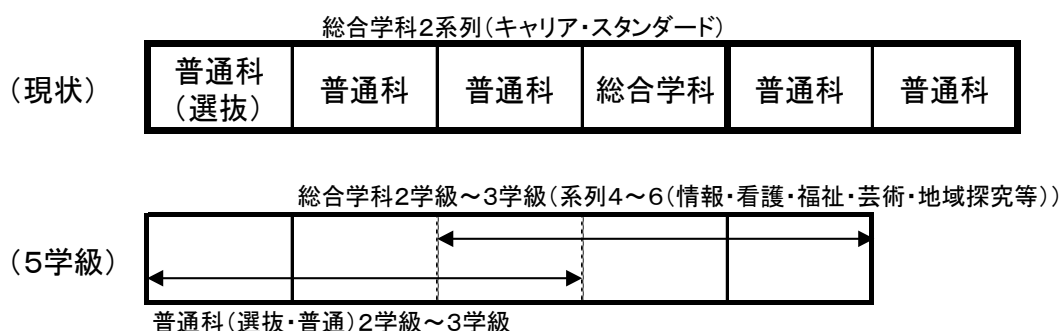
令和7年度に想定される5学級規模の高等学校の学びについて

想定 A 2校が統合して1つの校地で学ぶ（1校5学級規模）

【4学級から5学級へ1学級増となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・ 教員数が増えることから、理科（物理、化学、生物、地学）や地理歴史（日本史、世界史、地理）、芸術（音楽、美術、書道）などについて、これまでより多くの科目で専門性の高い教員を配置できる可能性が高まる。
- ・ 多様な科目の講座開設が可能となるなど、難関大学から専門学校までの進学や就職などの生徒の幅広い進路希望に応える教育活動がより充実する。
- ・ 将来の進路に関わって同じ興味・関心や目標を持つ者同士が一定数集まって学び合うなどの教育活動が充実する。さらに ICT を活用して他校とつながることでより効果的な学習に発展することが期待できる（R4～ 他校の夏期課外をオンラインで受講）。
- ・ 総合学科で学級増を行えば、現在の1学級2系列を2～3学級4～6系列にすることが可能となり、生徒のニーズの高い看護・福祉系、芸術系だけでなく、紀南高校で培ってきた地域を学び場とした学習を系列として設けることもできる。こうした地域を学び場とした学習は生徒が1校に集まることから、より広域かつ多様なテーマで学習を進めていくことも可能となる。



○想定される学校行事や部活動

- ・ 生徒数が増えることから、文化祭では学級や部活動の発表数が増え、体育祭では種目数や競い合う機会が増えるなど、学校行事をこれまでより活性化させることができる。
- ・ 部活動については、生徒数が増えることにより、団体競技における大会への参加の可能性が広がることや、多様な部活動の設定がある程度可能となる。また、既存の部活動についても、部員数の増加が見込まれ、活動がより活発となる。

○想定される生徒の状況等

- ・ 生徒や教職員の人数が増え、生徒は学校生活全般を通じて多様な価値観に触れ、切磋琢磨しながら協働的に学ぶ機会が増すことから、社会性・人間性の育成が一層期待できる。

- ・紀南地域の中学校卒業者の8割を超える生徒が同じ高校で学ぶことから、地域全体の子どもたちのつながりの一層の広がりが期待できる。
- ・一方、地域の中学生が1つの高校で学ぶことになるため、入試時や入学後も目的意識を持ちながら学習できるよう、5学級規模のうち総合学科を2～3学級にしたり、普通科にコースを設置したりすることで、校内に学びの選択肢を作るなどの工夫が必要である。
- ・今後も続く地域の中学校卒業者の増減に柔軟に対応することができる。

＜第2回協議会（7/14）の意見等＞

○学びについて

- ・生徒の興味・関心に応じた学習を選択できることが見込まれる
- ・より大きな学級規模となり、生徒の学習環境や授業内容が充実することが見込まれる

○部活動について

- ・地域からのニーズが高い部活動の維持につながり、社会性・人間性の育成に大きな効果が期待できる
- ・部活動の充実を求めて地域外へ進学する生徒もいるため、1校に統合して部活動を活発化し、ニーズに応えることが期待できる

○生徒の状況について

- ・大きな集団にすることでクラス替えもできることから、生徒は自分の居場所をつくることが期待できる
- ・紀南地域の中学校卒業者の8割を超える生徒が高校時代を一緒に過ごすことで、この地域の多様な価値観を持つ同年代の仲間とのつながりが広域で形成されることが期待される

○想定Aにおいて工夫すべき事項や課題

（学びについて）

- ・生徒一人ひとりに応じた丁寧な指導や支援を継続させていく工夫が必要
- ・地域の担い手を育む教育を進めるための工夫が必要
- ・学校の選択肢がなくなることで、生徒の学習に対するモチベーションが下がらないようにする工夫が必要

（通学について）

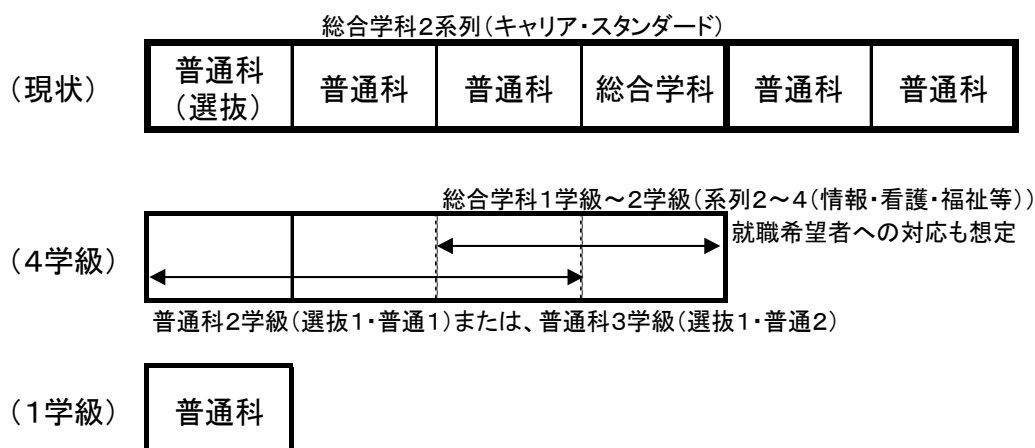
- ・現在より通学に時間のかかる生徒への支援の検討が必要

想定B 2校が連携して2つの校地で学ぶ（4学級＋1学級）

【2学級から1学級となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・1学級の学校では、生徒数・教員数は少なくなるものの、引き続き学び直し等の丁寧な指導や地域を学び場とした学習を行うことができる。
- ・教員配置は一般的に約8人となることから、単位数の小さい科目における常勤の教員の配置や生徒のニーズに応じた選択科目の開設は難しくなる。
- ・専門性の高い非常勤講師の確保が難しい当地域では、分校化して同じ学校の教員が学校間を行き来した授業や、ICTを活用した遠隔授業の実施など4学級規模の高校との連携や、地域を学び場とした学習等においてより地域と連携した活動を推進するなど様々な工夫が必要と考えられる。
- ・体育の授業は、1学級を男女別に分け、1講座の生徒数が20人を下回る状況が生じるため、ソフトボールやサッカーなどの集団競技において工夫が必要となる。



○想定される学校行事や部活動

- ・1学級の学校では、文化祭の部活動や学級の発表はこれまでと比べて半分となる。体育祭では生徒の活躍の機会が増える一方、同じ生徒同士が競い合う場面が多くなる。
- ・部活動では、部員数の減少に伴い、特に3年生の引退に伴って単独出場ができなくなることも多くなり、同じ状況の学校と合同チームを編成して大会に出場することが増える。
- ・現在のルールでは、単独出場ができない学校同士が合同チームを編成し大会に出場しているため、分校化することにより同一校として大会に出場することも考えられる。その際、週のうち何日かは、JRやバス等を利用していずれかの学校において練習することとなる。

○想定される生徒の状況等

- ・1学級規模ではクラス替えがなく、多様な価値観に触れる機会の減少や、人間関係の固定化が懸念されるため、学校行事、部活動だけでなく、日々の教育活動においても生徒が両校間を移動して共に学ぶ機会を設けるなどの工夫が必要となる。

- ・紀南地域は私立高校がなく公立高校のみで入学定員を設定しているため、2校をあわせると一定数の欠員が生じることとなる。欠員が1学級規模の学校に偏ると、定員の40人を大きく下回る入学者数となることも考えられ、入学者数が安定せず、生徒の学習環境が年度ごとに変化することが懸念される。

＜第2回協議会（7/14）の意見等＞

○学びについて

- ・生徒一人ひとりに対応した少人数ならではの丁寧な指導が継続できる

○生徒の状況について

- ・2校舎が存続することで、生徒の通学環境は変わらない

○想定Bにおいて工夫すべき事項や課題

(学びについて)

- ・豊かな社会性・人間性の育成のために、地域と協働した教育活動の推進やICTの活用が必要
- ・学びをより充実するために、校舎制にして、授業では教員が、学校行事や部活動では生徒が、校舎間を移動するなどの検討が必要

(部活動について)

- ・人数が少ないことで活動に制限がかかることへの対応が必要

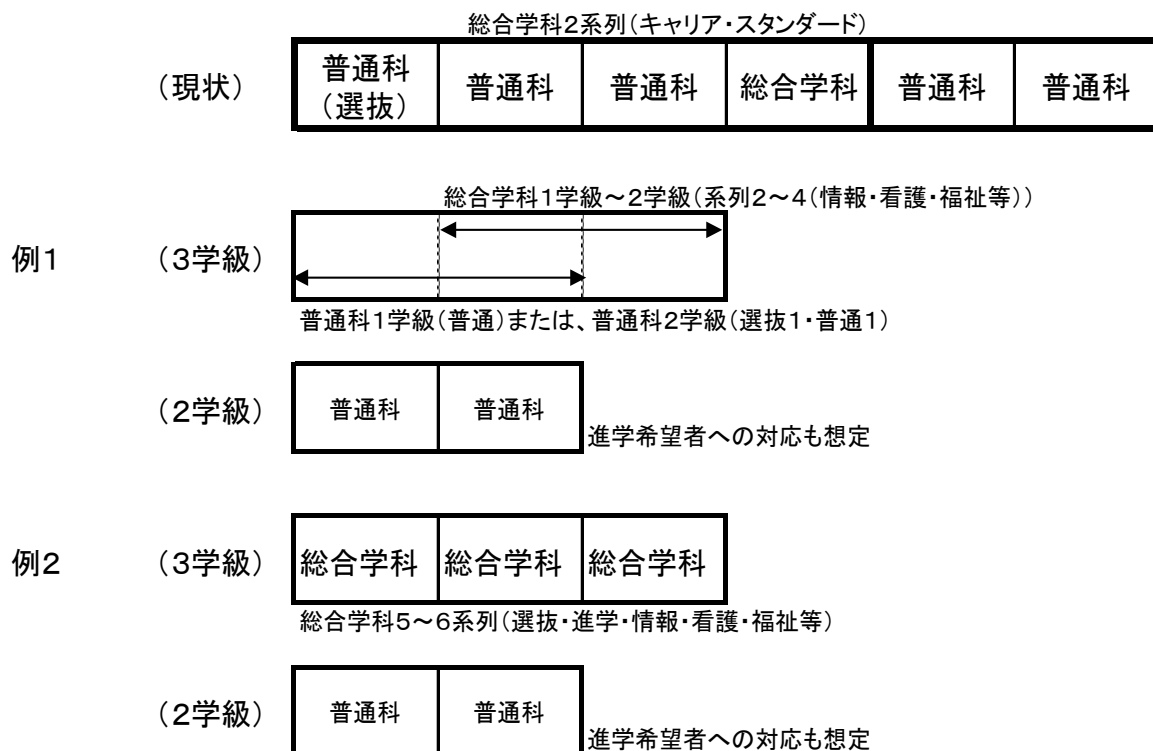
(教育環境の確保について)

- ・1学級規模の学校において大きく欠員を生じたときを想定した、教育環境の確保について検討が必要

想定C 2校が独立して学ぶ（1校3学級+1校2学級）
 【4学級から3学級へ1学級減となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・3学級の学校では、教員数が減ることから、理科や地理歴史、芸術等において、それぞれの科目で専門性の高い教員を配置することが難しくなる。
- ・進学については、大学ごとに面接や小論文を含む受験科目が異なり、問題の難易度や傾向についても様々であるため生徒をグループに分けて指導しているが、教員数が減ることにより、その数を減らすなどして対応することとなる。
- ・選択科目の1講座あたりの受講希望者数も減ることから、学びのニーズに応じた多様な選択科目の開設がこれまでより難しくなる。
- ・地域の学びの選択肢を確保するために、総合学科の学級数を増やすことも考えられるが、普通科1学級・総合学科2学級となり、普通科が現在の3学級から1学級になることで、いくつかの科目では文理別の講座編成が難しくなる可能性がある。
- ・もう一方の2学級の普通科では、引き続き学び直し等の生徒一人ひとりへの丁寧な指導や、これまで取り組んできた地域を学び場とした学習を取り入れながら教育活動を行うこととなる。



○想定される学校行事や部活動など

- ・3学級の学校では、これまでより文化祭や体育祭の規模が縮小される。
- ・教員数と生徒数が減少することから、部活動顧問や活動する生徒の確保が難しくなり、これまで設置していた部活動の整理が必要となる。
- ・2校とも学級規模が小さいため、3年生が引退後の新チームにおいて学校単独での大会出場が難しくなる可能性が双方において高くなる。また、状況によっては合同での出場となるが、2校のうち一方のみが単独出場できる場合は、他方は遠方の学校との合同チームとなることも想定される。

○想定される生徒の状況等

- ・両校とも小規模校であるため、教員との関係や生徒同士の集団の中で多様な考え方に触れながら行われる協働的な学びの機会の確保のために、両校同士や両校とそれぞれの地域との連携がより必要となる。
- ・小規模校では開設科目や部活動数が限定されるため、大学進学に向けた学びや部活動に励みたい中学生は、地域外の高校へ進学していくことが懸念される。
- ・今後も続く学級増減への対応の方向性が明確になりにくく、さらに両校とも小規模校であるため、1学級の増減が生徒の学びに大きく影響することが懸念される。

<第2回協議会（7/14）の意見等>

通学に関する状況について

1. 通学時間(県立高校全日制)について

(1) 県内地域別の生徒の通学所要時間

現在、県立高校に在籍する全生徒の通学所要時間については、15～30分の生徒が27.9%と一番多く、60分以内の生徒は86.4%である。一方、通学所要時間が1時間以上の生徒は、地域により差はあるものの、全体では13.6%存在している。

地域別県立高等学校(全日制)への通学所要時間(1～3年)

令和4年5月1日現在

学校名・地域名	15分以内	15～30分	30～45分	45～60分	60～90分	90～120分	120分以上	合計(人)
桑名・四日市地域(16校)	1,286 11.1%	3,233 27.9%	2,877 24.9%	2,670 23.1%	1,289 11.1%	194 1.7%	24 0.2%	11,573
鈴鹿・津地域(14校)	1,096 11.7%	2,485 26.6%	2,246 24.1%	2,224 23.8%	1,078 11.5%	177 1.9%	32 0.3%	9,338
松阪地域(6校)	575 19.8%	755 26.0%	643 22.2%	568 19.6%	284 9.8%	65 2.2%	12 0.4%	2,902
伊勢志摩地域(9校10校舎)	476 13.5%	1,037 29.5%	722 20.5%	620 17.6%	528 15.0%	107 3.0%	27 0.8%	3,517
伊賀地域(5校)	603 19.8%	956 31.4%	513 16.8%	580 19.0%	318 10.4%	65 2.1%	14 0.5%	3,049
東紀州地域(3校)	273 24.3%	333 29.6%	282 25.1%	176 15.7%	54 4.8%	5 0.4%	1 0.1%	1,124
合計	4,309 13.7%	8,799 27.9%	7,283 23.1%	6,838 21.7%	3,551 11.3%	613 1.9%	110 0.3%	31,503

(2) 東紀州地域の生徒の通学所要時間

東紀州地域の県立高校3校に在籍する全生徒の通学所要時間については、60分以内の生徒が94.7%である。なお、木本・紀南両校への通学所要時間が90分以上の生徒4名は紀北町からの通学者である。

東紀州県立高等学校(全日制)への通学所要時間(1～3年)

令和4年5月1日現在

学校名・地域名	15分以内	15～30分	30～45分	45～60分	60～90分	90～120分	120分以上	合計(人)
尾鷲	183 40.1%	152 33.3%	82 18.0%	32 7.0%	5 1.1%	1 0.2%	1 0.2%	456
木本	71 15.0%	116 24.6%	136 28.8%	111 23.5%	37 7.8%	1 0.2%	0 0.0%	472
紀南	19 9.7%	65 33.2%	64 32.7%	33 16.8%	12 6.1%	3 1.5%	0 0.0%	196
東紀州地域(3校)	273 24.3%	333 29.6%	282 25.1%	176 15.7%	54 4.8%	5 0.4%	1 0.1%	1,124

2. 地域の中学校からの通学状況

紀南地域内の駅・バス停から木本高校、紀南高校への通学の状況については以下のとおりとなっている。

OR4木本高校生(全日制)の通学状況

中学校	在籍数	主な公共交通機関	登校	下校	駅/バス停(中学最寄-高校最寄)		所要時間
木本中	77	自転車	—	—			約10分
有馬中	102	自転車	—	—			約30分
新鹿中	7	J R	8:09→8:20	20:10→20:26	新鹿駅	熊野市駅	約40分
飛鳥中	12	三交バス	8:02→8:20	17:20→17:38	小阪	新町	約40分
入鹿中	9	バスA	7:41→8:27	19:10→19:56	入鹿中学校前	木本高校	約60分
(五郷中)	1	バスB	7:35→8:10	19:25→20:00	五郷学校前	新町	約50分
(神上中)	2	バスC	7:37→8:12	17:25→18:03	神上	新町	約50分
御浜中	68	J R	8:12→8:22	19:28→19:36	神志山駅	熊野市駅	約30分
阿田和中	40	J R	8:04→8:22	19:28→19:44	阿田和駅	熊野市駅	約45分
尾呂志学園中	5	バスA	7:53→8:27	19:10→19:44	高千良	木本高校	約30分
矢瀨中	99	J R	7:52→8:22	19:28→20:00	鶯殿駅	熊野市駅	約60分
相野谷中	3	バス+ J R	6:40→8:22	16:33→18:30	大里	熊野市駅	約120分

OR4紀南高校生の通学状況

中学校	在籍数	主な公共交通機関	登校	下校	駅/バス停(中学最寄-高校最寄)		所要時間
木本中	10	J R	8:23→8:38	19:51→20:09	熊野市駅	阿田和駅	約45分
有馬中	38	J R	8:27→8:38	19:51→20:05	有井駅	阿田和駅	約40分
新鹿中	2	J R	8:09→8:38	19:51→20:26	新鹿駅	阿田和駅	約50分
飛鳥中	1	三交バス	8:02→8:45	16:55→17:38	小阪	御浜町阿田和	約55分
入鹿中	6	バスE	7:55→8:29	18:06→18:40	入鹿中学校前	紀南高校前	約40分
(五郷中)	0	バスB+ J R	7:35→8:38	18:10→20:00	五郷学校前	阿田和駅	約90分
(神上中)	0	バスB+ J R	7:34→8:38	16:31→18:03	神上中学校前	阿田和駅	約90分
御浜中	31	自転車	—	—			約30分
阿田和中	20	自転車	—	—			約10分
尾呂志学園中	1	バスE	8:06→8:29	18:06→18:29	尾呂志	紀南高校前	約40分
矢瀨中	64	J R	7:52→8:04	19:51→20:00	鶯殿駅	阿田和駅	約40分
相野谷中	6	バス	8:12→8:31	16:26→16:45	相野谷中学校	紀南高校前	約30分

[木本高校] 始業 8:45～終業 15:30(7限 ～16:15)

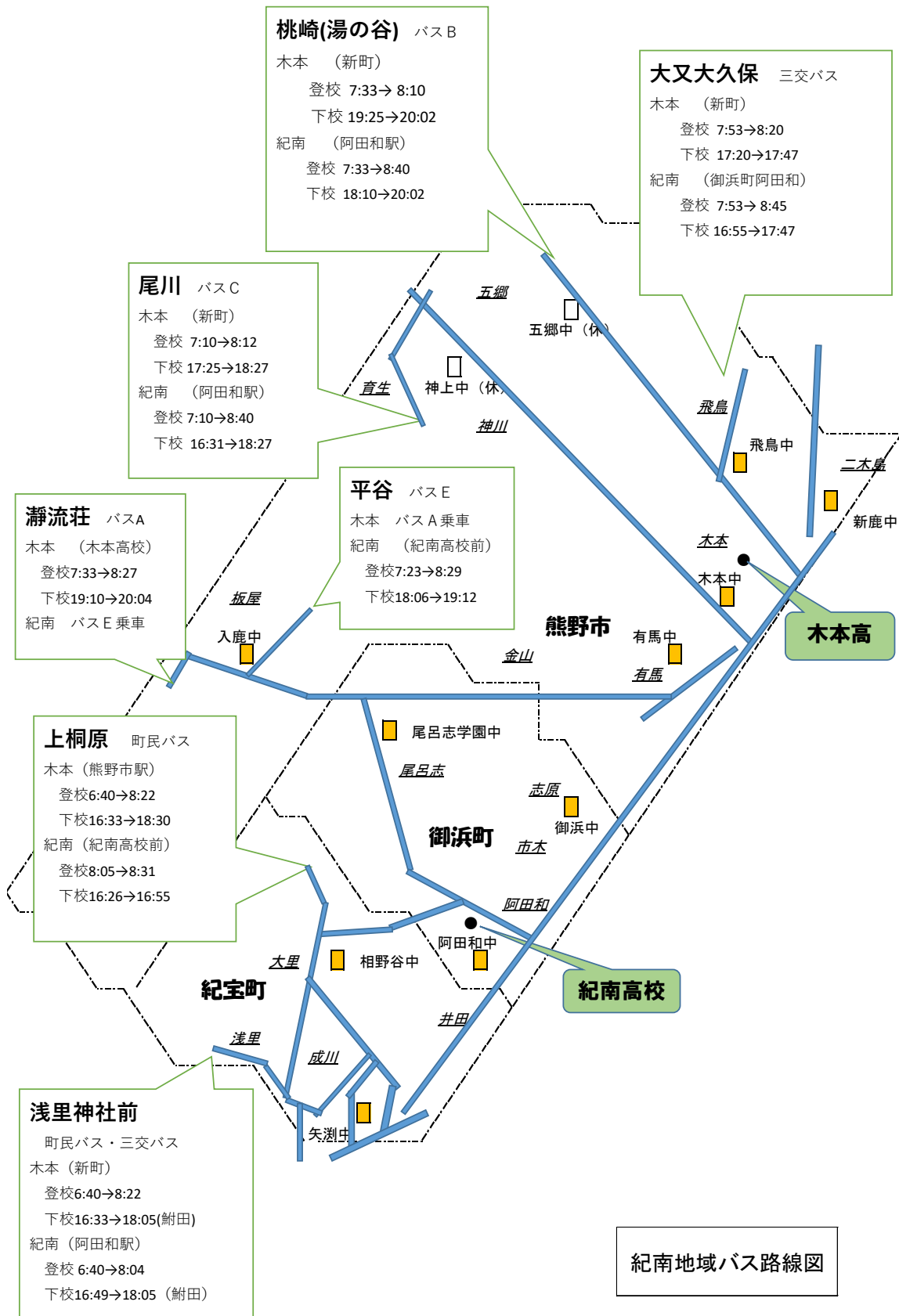
[紀南高校] 始業 9:05～終業 16:05

(参考1) : 覚書により志願できる和歌山県立高等学校

志願できる居住地など	志願できる高等学校
<ul style="list-style-type: none"> 相野谷中学校に在籍する者かつ相野谷中学校区及び旧矢瀨中学校浅里分校区に在住するもの 旧上川中学校区で熊野川中学校に教育委託生として在籍する者 	和歌山県立新宮高等学校 和歌山県立新翔高等学校

(参考2)

紀南地域の生徒の木本・紀南両校への通学について



高等学校における遠隔授業【教科・科目充実型】

(1) 遠隔授業【教科・科目充実型】の制度化

- 平成27年4月より、高等学校の全日制・定時制課程における**遠隔授業【教科・科目充実型】**を正規の授業として制度化し、対面により行う授業と同等の教育効果を有するとき、**受信側に当該教科の免許状を持った教員がいなくても、同時双方向型の遠隔授業を行うことができる**としている。
- これにより、高等学校段階において、先進的な内容の学校設定科目や相当免許状を有する教師が少ない科目（第二外国語等）の開設、小規模校等における幅広い選択科目の開設等、**生徒の多様な科目選択を可能とすること等により、生徒の学習機会の充実を図る。**

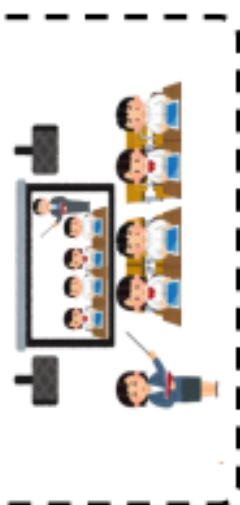
合同授業型

- 児童生徒が多様な意見や考えに触れたり、協働して学習に取り組んだりする機会の充実を図る。



送信側

教師 + 児童生徒



受信側

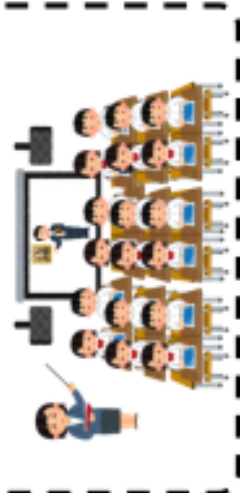
教師支援型

- 児童生徒の学習活動の質を高めるとともに、**教員の資質向上**を図る。



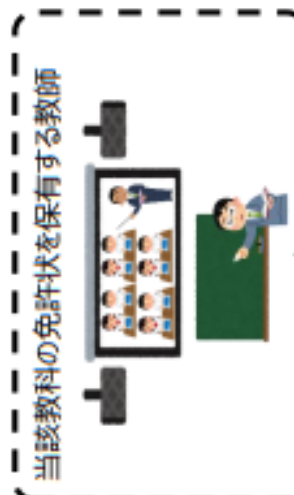
同時双方向

教師 + 児童生徒



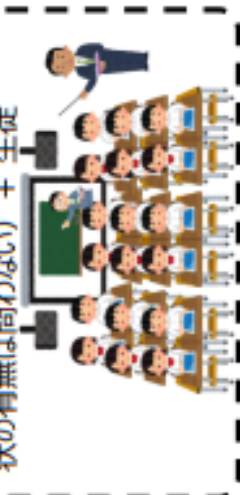
教科・科目充実型

- ※高等学校段階のみ
- 生徒の多様な科目選択を可能とすることなどにより、**学習機会の充実**を図る。



同時双方向

当該学校の教師（当該教科の免許状の有無は問わない） + 生徒



高等学校における遠隔授業【教科・科目充実型】

(2) 遠隔授業【教科・科目充実型】を行う際の主な留意事項

生徒数	・同時に授業を受ける生徒数は、原則として40人以下とすること。
配信側	・受信側の高等学校等（生徒の在籍する高等学校等）の身分を有すること。 ・学校種や教科等に応じた相当の免許状を有すること。
受信側	・原則として 教員を配置するべき であること。 ※ただし、病室等において病気療養中の生徒等に対して遠隔授業を行う場合には、教員配置は必ずしも要しない（その場合には、病室等での適切な体制整備が必要）
学習評価	・単位認定等の評価は、配信側の教員が行うべきであること。（受信側教員はそれに協力）
その他	・遠隔授業を行う教科・科目等の特質に応じ、 対面により行う授業を相当の時間数行うこと。 ・ 36単位を上限 とすること。 ※ただし、病室等において病気療養中の生徒等に対して遠隔授業を行う場合には、単位数上限の算定には含まない ※※主として対面により授業を実施するものは単位数上限の算定に含まない

(3) 病気療養中の生徒等に対して行う場合の要件緩和

- 病室等における病気療養中の生徒等に対し**同時双方向型の遠隔授業を行う場合の特例**として、令和元年11月には**受信側の病室等に当該高等学校等の教員を配置することは必ずしも要しないこと**とするとともに、令和2年4月には**修得単位数の上限（36単位）の算定に含まないこと**とする制度改正を実施。

(参考) 関係法令抜粋

■ 学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）

第88条の3 高等学校は、文部科学大臣が別に定めるところにより、授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室以外の場所で行うことができる。

第96条 校長は、生徒の高等学校の全課程の修了を認めるに当たっては、高等学校学習指導要領の定めるところにより、74単位以上を修得した者について行わなければならない。ただし、（略）

2 前項前段の規定により全課程の修了の要件として修得すべき74単位のうち、第88条の3に規定する単位数は36単位を超えないものとする。ただし、疾病による療養のため又は障害のため、病院その他の適当な場所で医療の提供その他の支援を受ける必要がある生徒であつて、相当の期間高等学校を欠席すると認められるものについては、この限りでない。

部活動の状況と統合による変化について

1 両校の部活動の状況

【木本高校】

	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数	全校生徒数	全学級数
令和4年度	10部	220人	5部	140人	472人	12組

高校総体後に男子バレーボール部と女子バスケットボール部が廃部

【紀南高校】

	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数	全校生徒数	全学級数
令和4年度	7部	51人	9部	48人	196人	7組

○合同チームでの出場状況

各学校の生徒数の減少に伴い、県内でも1年生大会や1・2年生で参加する新人大会においては、小規模校を中心に合同チームでの出場が増えている。また、全学年が揃う大会においても、出場選手数が多い団体競技などでは、合同チームでの出場が見られている。木本・紀南両校における令和3～4年度の合同チームでの出場状況は以下のとおりである。

- < 野球 > 令和4年 4月 合同チームは4チーム参加（春季大会）
 鳥羽+志摩+南伊勢+紀南 など
 令和3年11月 合同チームは4チーム参加（1年生大会）
 水産+志摩+鳥羽+南伊勢+昴学園+紀南 など
- < サッカー > 令和4年 1月 合同チームは2チーム参加（新人大会）
 昴+木本

2 統合による部活動の変化

(1) 1校舎に統合することによって想定される部活動

学校規模が大きくなることで生徒数が増えることから、団体競技における大会への参加の可能性が広がることや、多様な部活動の設置がある程度可能となる。また、既存の部活動についても、部員数の増加が見込まれ、活動がより活発となる。

(2) 統合して校舎制とすることによって想定される部活動

競技によっては両校舎で1チームとして出場することもできる。

○放課後の両校間の移動について

授業終了後に生徒が公共交通機関を利用して移動した場合、部活動時間は約1～2時間程度となることが見込まれる。

(参考 1)

J R 駅から両校への徒歩移動は合計 30 分、バス停から両校への徒歩移動は合計 20 分として算出した。

<木本高校から紀南高校への移動> (6 限目終了後 15 : 30 に移動)

(JR)		(三交バス)	
熊野市駅	16:33	新町	15:45
阿田和駅	16:48	御浜町阿田和	16:10
↓(部活動)		↓(部活動)	
阿田和駅(多気方面発)	18:10	御浜町阿田和(熊野市方面発)	18:55
(新宮方面発)	18:44	(新宮方面発)	18:55

部活動時間は JR : 50 分程度、三交バス : 145 分程度

<紀南高校から木本高校への移動> (6 限目終了後 16 : 05 に移動)

(JR)		(三交バス)	
阿田和駅	16:31	御浜町阿田和	16:55
熊野市駅	16:50	新町	17:20
↓(部活動)		↓(部活動)	
熊野市駅(多気方面発)	18:27	新町(新宮方面発)	18:30
(新宮方面発)	18:28	多気方面へは熊野市駅よりJR	

部活動時間は JR : 65 分程度、三交バス : 50 分程度

(参考 2) 木本高校・紀南高校の日課

<木本高校>		<紀南高校>	
SHR	8:45 ~ 8:55	SHR	9:05 ~ 9:15
1限目	9:00 ~ 9:50	1限目	9:20 ~ 10:10
昼休み	12:50 ~ 13:30	昼休み	12:10 ~ 12:50
6限目	14:30 ~ 15:20	6限目	14:50 ~ 15:50
SHR/掃除	15:20 ~ 15:30	SHR/掃除	15:45 ~ 16:05
7限目	15:25 ~ 16:15		

7 限目・・・(月)1 年生普通科・総合学科
(月・木) 2 年生普通科選抜コース

(参考 3) J R ・ 三交バス時刻表

木本高校から移動

JR(新宮方面行)		三交バス(新宮方面行)	
熊野市発	阿田和着	新町発	御浜町阿田和着
12:46	13:04	14:30	14:55
16:33	16:48	15:45	16:10
18:28	18:44	16:30	16:55
		18:30	18:55

紀南高校から移動

JR(多気方面行)		三交バス(大又大久保方面行)	
阿田和発	熊野市着	御浜町阿田和発	新町着
13:44	13:58	14:55	15:20
15:46	16:01	15:55	16:20
16:31	16:50	16:55	17:20
18:10	18:26	17:55	18:20

紀南地域の設置学科と学級数の推移

参考資料1 R4第1回協議会資料

学校名	学科名	学級数																															
		49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
木本	普通	7	6	7	7	7	7	7	6	5	6	6	6	6	6	6	6	6	6	7	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2
	商業	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2												
	家政	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1													
	総合学科																																
紀南	計	10	9	10	10	10	10	10	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7	7
	普通	6	5	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	5	5
	計	6	5	6	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	6	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	3	3	3
合計		16	14	16	16	16	16	16	15	13	14	14	14	14	14	14	14	14	14	15	14	14	13	13	13	13	13	13	11	11	10	10	

【木本高校総合学科の系列の推移】

平成6年（5クラス）設置：初年度

- ①国際教養系 ②環境科学系 ③情報系 ④ビジネス系
- ⑤芸術・文化系 ⑥生活科学系 ⑦体育武道系

平成26年（2クラス）設置

- ①家庭系列 ②情報・会計系列
- ③スポーツ系列 ④スタンダード系列

令和2年度（1クラス）設置

- ①キャリア系列 ②スタンダード系列

学校名	学科名	学級数																			
		18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	2	3	3	3	4	
木本	普通	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
	商業																				
	家政																				
	総合学科	5	4	4	4	4	4	4	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	
紀南	計	7	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	
	普通	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	
	計	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	
合計	10	9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	8	8	7	6	6	6	6	6		

学級規模による教育環境の比較

1. 開設科目【普通科における科目の開設状況の例】

同じ普通科であっても各校の特色やコース設定があるため単純な比較はできないものの、学級規模が小さくなることにより、それぞれ開設科目が減少する傾向があります。

教科	科目	A校5学級	B校4学級	C校3学級	D校2学級	E校1学級
国語	現代の国語	○	○	○	○	○
	言語文化	○	○	○	○	○
	論理国語	○	○	○	○	○
	文学国語	○	○	○	○	○
	国語表現	○	○	○	○	○
	古典探究	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	④	③	○	②
地理歴史	地理総合	○	○	○	○	○
	地理探究	○	○	○	○	○
	歴史総合	○	○	○	○	○
	日本史探究	○	○	○	○	○
	世界史探究	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	○	○	○	○
	公民	公共	○	○	○	○
政治・経済		○	○	○	○	○
(学校設定科目等)		○	○	○	○	○
数学	数学Ⅰ	○	○	○	○	○
	数学Ⅱ	○	○	○	○	○
	数学Ⅲ	○	○	○	○	○
	数学A	○	○	○	○	○
	数学B	○	○	○	○	○
	数学C	○	○	○	○	○
	(学校設定科目)	⑤	③	③	②	○
理科	科学と人間生活	○	○	○	○	○
	物理基礎	○	○	○	○	○
	化学基礎	○	○	○	○	○
	生物基礎	○	○	○	○	○
	地学基礎	○	○	○	○	○
	物理	○	○	○	○	○
	化学	○	○	○	○	○
	生物	○	○	○	○	○
(学校設定科目等)	○	○	○	○	②	
保健体育	体育	○	○	○	○	○
	保健	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	○	○	○	○
芸術	音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	○	○	○	○	○Ⅰのみ
	美術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	○	○	○	○	○Ⅰのみ
	書道Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	○	○Ⅲなし	○	○	○
	(学校設定科目)	○	⑥	○	②	②
外国語	英語コミュニケーションⅠ	○	○	○	○	○
	英語コミュニケーションⅡ	○	○	○	○	○
	論理・表現Ⅰ	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	④	⑤	○	○	③
家庭	家庭基礎 または 家庭総合	○	○	②	○	○
	フードデザイン	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	○	○	○	③
情報	情報Ⅰ	○	○	○	○	○
	情報Ⅱ	○	○	○	○	○
	その他	○	○	○	○	○
商業	簿記	○	○	○	○	○
	情報処理	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	○	○	②	③
(学校設定科目等)	○	②	○	②	②	

○の中の数字は設置された科目数。○のみは1科目

2. 教員配置

各校に配置する教員数は、学級数（≒募集定員）に応じて定められており、

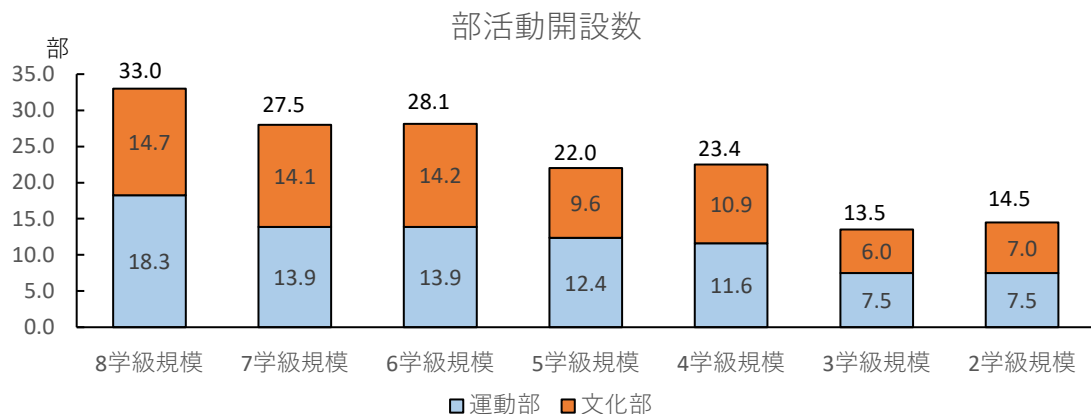
1学級減るごとに5～7人の教員が減ります。

学級数	8学級	7学級	6学級	5学級	4学級	3学級	2学級	1学級
教員数 (人)	52	47	42	35	28	22	15	8

※ 上記以外に一定の加配教員、非常勤講師の配置あり

3. 部活動

部活動開設数については、4～8学級規模の学校では平均22～33部が開設されている一方で、2～3学級規模の学校では平均13.5～14.5部と、6学級規模以上の学校の半分程度になっているなど、学校規模が小さくなるほど生徒における部活動の選択の幅は限られる状況となっています。また、硬式野球、サッカー、バレーボール、バスケットボールなどの団体競技に所属する生徒数が少なくなり、単独チームでの大会出場が難しくなっています。



※ 令和2年度三重県学校体育・部活動実態調査より

【木本高校】

	募集定員	全学級数	全校生徒数	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数
令和4年度	4学級	12組	472人	12部	220人	5部	140人
令和3年度	4学級	13組	515人	12部	243人	6部	169人
令和2年度	4学級	14組	545人	13部	226人	7部	168人
令和元年度	5学級	15組	580人	15部	264人	10部	199人
平成24年度	6学級	18組	674人	18部	306人	14部	220人
平成18年度	7学級	21組	834人	19部	319人	16部	241人

【紀南高校】

	募集定員	全学級数	全校生徒数	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数
令和4年度	2学級	7組	196人	7部	51人	9部	48人
令和3年度	2学級	6組	176人	7部	51人	9部	36人
令和2年度	2学級	7組	193人	8部	58人	10部	52人
令和元年度	2学級	8組	236人	9部	79人	10部	80人
平成24年度	3学級	9組	326人	8部	115人	10部	59人
平成18年度	3学級	9組	287人	8部	85人	10部	59人

東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）

参考資料 3 R4第2回協議会資料

令和4年5月1日 教育政策課調べ

	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 卒業	R 5.3 現中3	R 6.3 現中2	R 7.3 現中1	R 8.3 現小6	R 9.3 現小5	R 10.3 現小4	R 11.3 現小3	R 12.3 現小2	R 13.3 現小1
尾鷲市	卒業生数	122	118	130	127	119	107	99	120	87	84	68	87
	前年度対比		-4	12	-3	-2	-12	-8	21	-33	-3	-16	19
	R4.3対比					-6	-20	-28	-7	-40	-43	-59	-40
北牟婁郡	卒業生数	115	110	112	121	93	75	94	79	68	79	70	62
	前年度対比		-5	2	9	-6	-18	19	-15	-11	11	-9	-8
	R4.3対比					-22	-46	-27	-42	-53	-42	-51	-59
小計	卒業生数	237	228	242	248	212	182	193	199	155	163	138	149
	前年度対比		-9	14	6	-8	-30	11	6	-44	8	-25	11
	R4.3対比					-28	-66	-55	-49	-93	-85	-110	-99
熊野市	卒業生数	132	113	117	119	109	96	101	104	104	123	98	98
	前年度対比		-19	4	2	9	-13	5	3	0	19	-25	0
	R4.3対比					-19	-23	-18	-15	-15	4	-21	-21
南牟婁郡	卒業生数	172	143	157	149	161	135	140	127	136	137	102	150
	前年度対比		-29	14	-8	12	-19	5	-13	9	1	-35	48
	R4.3対比					12	-14	-9	-22	-13	-12	-47	1
小計	卒業生数	304	256	274	268	261	231	241	231	240	260	200	248
	前年度対比		-48	18	-6	-7	-32	10	-10	9	20	-60	48
	R4.3対比					-7	-37	-27	-37	-28	-8	-68	-20
東紀州合計	卒業生数	541	484	516	516	481	413	434	430	395	423	338	397
	前年度対比		-57	32	0	-35	-62	21	-4	-35	28	-85	59
	R4.3対比					-35	-103	-82	-86	-121	-93	-178	-119

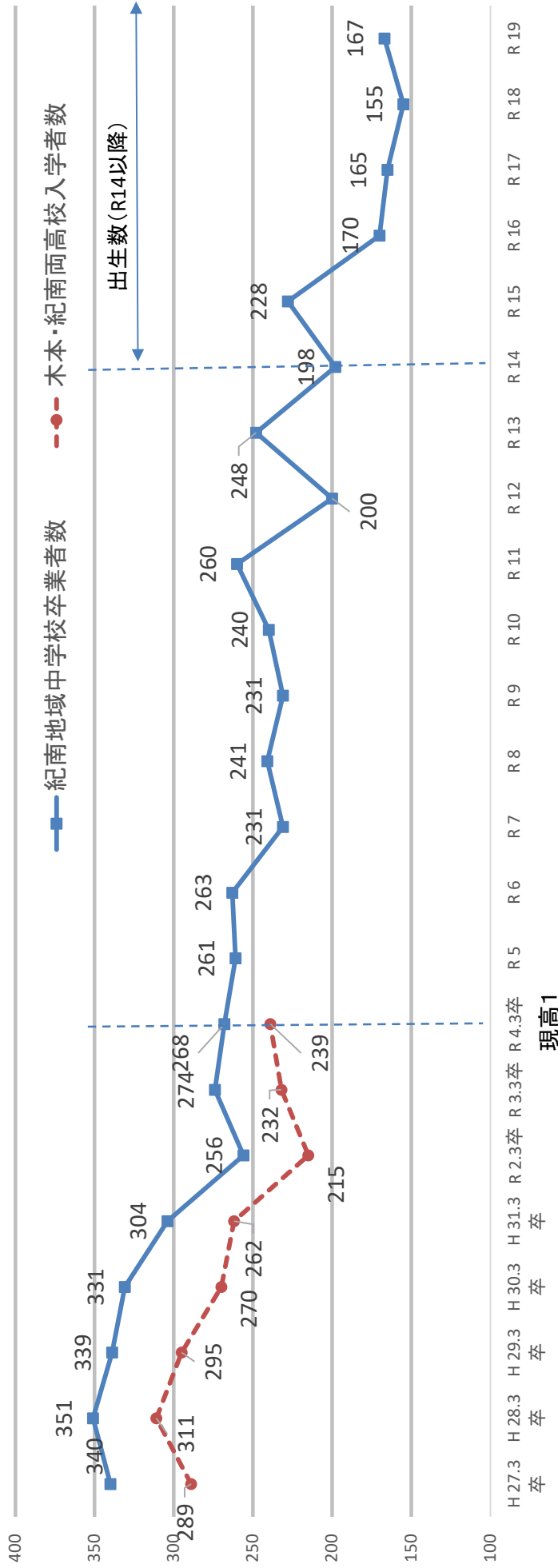
《参考》

木本高校	募集定員	200	160	160	160	160
	欠員	0	2	0	1	-
紀南高校	募集定員	80	80	80	80	80
	欠員	18	23	8	0	-
学級数	木本・紀南	5・2	4・2	4・2	4・2	4・2

紀南地域の 入学定員の推移予測		R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度	R 9年度	R 10年度	R 11年度	R 12年度	R 13年度
	6学級	6学級	6学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	6学級程度	4学級程度	5学級程度

熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数(予測)と木本・紀南両高等学校への入学者数

※R14年度以降は地域の出生数を記載



熊野市・南牟婁郡の出生数

	H27年度出生	H28年度出生	H29年度出生	H30年度出生	R元年度出生	R2年度出生	R3年度出生
現小1	99	73	108	60	87	82	68
熊野市	52	42	45	39	25	20	38
御浜町	102	83	75	71	53	53	61
合計	253	198	228	170	165	155	167

1. 木本・紀南両高等学校への入学者人数は、熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数と比較すると、地域外へ進学する生徒や就職する生徒等が一定存在することから、毎年40人～50人少ない状況です。この状況のまま推移すると、両校への入学者数は令和7年度には5学級規模、令和12年度には4学級規模となることが見込まれます。
2. 令和7年度に両校への入学者数が5学級規模となった場合、中学校卒業予定者の進路選択をふまえると、令和7年度以降の当地域における県立高等学校のあり方について協議を進め、方向性を示していく必要があります。